

さんむのふるさと散歩

No.9

今回は、山武地区に残されている江戸時代の野馬土手について紹介します。

◇ ◇ ◇

野馬土手って何？と思われる方も多いと思います。

早い話が牧場から馬が逃げ出して、農作物を荒らすのを防ぐために周囲に巡らせた土手のことです。

馬の牧場というと、競争馬

の飼育かな？と簡単に考えてしまいましたが、さにあらず。戦に必要な軍馬や物資輸送用の馬を育成するための施設だったのです。

野馬土手がみられる山武地区の北部から西部地域にかけては、かつて広大な原野が広がり、平坦な台地上には関東ローム層が厚く堆積し、乾燥しやすいため、人の居住や農業にはあまり適していませんでした。

しかし、馬の放牧場としては、好適な条件といえました。フラットな障害物の少ない原野は馬の集散に適しており、まばらにみられる谷間の湧水で馬の飲料水を確保することができました。

また、寒暖の差が激しい内陸性の気候も馬の飼育に好都合だったようです。

このような地形特性は、下総台地の内陸部に共通するもので、多くの馬牧が営まれました。佐倉七牧・小金五



上の写真の雑草の生い茂っているところが野馬土手です。遠くまで真っ直ぐ続いています。



佐倉七牧分布図 (成田市ホームページに加筆して転載)

牧(さくらしちほく・こがねごぼく)と呼ばれています。山武地区の北部から西部地域に見られる野馬土手は、佐倉七牧の高野牧・柳沢牧・小間子牧に属するものです。牧周辺の村々は野付村と呼ばれ、野馬土手の修理など施設の維持管理や病気になった馬の処置、年一回行われる野馬の捕獲など、多くの負担を強いられました。その反面、当時の農業に不可欠であった草木等の「緑肥」を牧内から優先的に採取する権利を与えられるなど、周辺の村々と牧とは深いつながりがあったのです。